

仲道齋の反古文辞作文説

竹 治 貞 夫

仲道齋はもとの姓は田中で、田中道齋とも呼ばれ、近時二つの叢書、

杉本つとむ編『異体字研究資料集成』第四卷（昭四九・六

雄山閣刊）

長沢規矩也編『影印日本随筆集成』第三輯（昭五三・七汲

古書院刊）

に彼の名著『道齋隨筆』三巻が収録されて、今日なお学界の一隅にその命脈を保っている。しかしながらこれらの叢書の解説には、ただ道齋を阿波の人とするだけで、彼の経歴や人物については、一切不明であるとしている。私は阿波漢学史の研究に志してから、徳島市南佐古三番町清水寺の裏山墓地の無縁墓の中から、草木に埋もれた道齋の墓碑を苦心して捜し出し、その門人で洲本学問所の教官であった藤江石亭が書いた碑銘を読み、彼の経歴の概要を知ることができた。

次に道齋が残した著作とその所在とを、岩波書店刊『国書総目録』等によって検索した結果、現存書八種、佚書九種、その他の現存詩文四篇の存在を知ることができた。その書目を掲げると、次のごとくである。

現存書八種

- (1) 尺牘称谓一冊（宝暦五年一七五五刊、大阪府立中之島図書館蔵）
- (2) 弇州尺牘紀要二卷一冊（宝暦六年一七五六刊、東北大学図書館狩野文庫蔵）
- (3) 道齋尺牘附雜文一冊（同年刊、竜谷大学図書館蔵）
- (4) 道齋先生承諭編一冊（宝暦七年一七五七刊、同館蔵）
- (5) 道齋隨筆三卷三冊（同年刊、筆者蔵）
- (6) 古文孝経解一冊（天明六年一七八六刊、東北大学図書館狩野文庫蔵）
- (7) 唐文式一卷（宝暦四年一七五四序、写本、同文庫蔵）『道齋稿』収）

(8) 瀕言考三卷一冊(安政二年一八五五写本、早稲田大学図書館蔵)

佚書九種

- (1) 印字選(刊本)
- (2) 滄溟尺牘弁疑(未刊)
- (3) 続稱謂弁(同)
- (4) 夜話集(同)
- (5) 文章狐白(同)
- (6) 道齋奇字(同)
- (7) 雅俗成語(同)
- (8) 藻鏡録(同)
- (9) 道齋先生詩集三冊(同)

その他の現存詩文

- (1) 明詩解序(宝暦三年一七五三刊)『国朝名公詩選』収
- (2) 称謂弁(『道齋稿』収)
- (3) 甘藷伝(同)
- (4) 七言絶句「将婦阿州留別諸子」(安永三年一七七四刊、江村北海編『日本詩選』巻九収)

そこでこれらの著作の内容を調べ、これを墓碑銘の文とつき合わせて考察し、以下のような道齋の略歴が明らかになった。

享保七年(一七三二)一歳。徳島の南郊齋田(現徳島市昭和地区)に生まれた。名は和、字は文平、道齋と号す。父は関氏、故あって母方の姓田中氏を称し、修して仲とした。

元文二年(一七三七)一六歳。京都に遊学し、寺町錦小路に

あつた浄土宗蓮寺の住職で音韻学者として有名な無相上人文雄に師事し、業成つて後京都で私塾を開いて教授した。

宝暦三年(一七五三)三二歳。多くの著作を残しているが現存の著書の刊行年月および詩文の日付は、『古文孝経解』の外はすべてこの年から宝暦七年(一七五七、三六歳)までの五年間に集中している。

宝暦八年(一七五八)三七歳。この頃肺疾のため郷里の徳島に帰つた。以後は養生に努めて快復し、阿波と淡路の間を往来して、多くの門弟を養成した。

天明八年(一七八八)六七歳。十一月十八日病没し、清水寺墓地に葬られた。

二

さて門人藤江石亭が書いた墓碑銘に、

先生は幼にして穎悟、学を好んで倦まず、最も徂徠・春台等の学を好む。京師に遊んで、了蓮の無相師に従ひ、大いに音韻の奥を得て、遂に一家を開き、門生輻湊す。

と云うように、道齋は荻生徂徠・太宰春台のいわゆる古文辞学を好み、春台に学んだ無相上人文雄に入門しているが、丁度彼が上京した元文の初年から十二、三年の間は、京都に古文辞学流行の波がおし寄せていた時代であつた。そのことは、那波魯堂の『学問源流』に、

徂徠ノ説、享保ノ中年以後ハ、信ニ一世ニ風靡スト云ベシ。然レドモ京都ニテ至テ盛ニ有シハ、徂徠没シテ後、元文

ノ初年ヨリ、延享・寛延ノ比マデ、十二年ノ間ヲ甚シトス。世ノ人其説ヲ喜ンデ習フコト、信ニ狂スルガ如シト謂ベシ。

と見える。この魯堂は、後半生を阿波の藩儒として過ごし、徳島の地に骨を埋めたが、道齋より五歳年少で、その前半生は京都で魯堂塾を開いていた人物である。

道齋が学んだ日本の古文辞学の祖、荻生徂徠の学問について述べた吉川幸次郎博士「徂徠学案」（日本思想大系36）『荻生徂徠集』収は、徂徠の生涯を三期に分ち、その活動の中心は四十歳ごろまでの第一期は語学者たるにあり、それからおよそ五十歳までの第二期は文学の実作者たるにあり、それ以後六十三歳の死（享保一三年一七二八）までの第三期は哲学者たるにあつたと特色づけている。今、道齋の遺著によつて彼の学風を見ると、最も語学者としての業績に富み、また古文の実作者として英才を発揮しており、この両面において徂徠・春台の学を継承したことが認められる。

道齋の主著と見るべき『道齋隨筆』は、漢字の字音・字義・字形に関して、中国の古書を読む上に必要有益と考えられる事項を、懇切な注を加えつつ網羅的に集めている。また『遯言考』の一書は、日常の俗語や俗諺の中から漢語・漢籍および仏語・仏典とかかわりのあるもの九百余を取りあげて、その語源を探り典拠を求めた力作である。これらは語学者道齋の力量を示すものである。その他の著作に通じて見られる彼の業績の主要なものは、尺牘の研究と実作とである。そこには語学者である

とともに優れた古文の実作者であつた道齋の面目が、遺憾なく発揮されている。

まず尺牘の研究書として、『尺牘称謂弁』がある。これは実に豊富で精密な尺牘用語の解説・集成であり、また親切な尺牘作成の入門書である。『弇州尺牘紀要』は明の古文辞派の領袖であつた王世貞の尺牘の注解であり、佚書の『滄溟弁疑』も、同様に李攀竜の作品を注解したものと考えられる。この二書は道齋がかつて古文辞派の詩文を熱心に学んだ跡を示すものである。次に道齋自身の尺牘作品集として、『道齋尺牘附雜文』と『道齋先生承論編』があり、この二書には合計六十三篇の尺牘と、雜文七篇が収録されている。なおその外の著作に見える文章をも加えて集計すると、道齋の現存の散文作品の篇数は左のごとくである。

尺牘	六三篇
書序	五篇
伝	二篇
弁	二篇
送序・論・説・題・記	各一篇
合計	七七篇

これらの作品は、古文の実作者としての道齋の力量を示すとともに、その中にしばしば彼の文章論・作文説が展開されている点に注目される。また前述のごとく、彼の現存作品はすべて三十歳代の数年間という短期間に作られたものであり、その文才の非凡さを示している。僧義竜が『道齋尺牘』の序文で、彼

の文章を作るスピードを、「霏々として屑のごとく、瀉々として水のごとし」と形容しているのは、実を伝えるものであろう。

なおここで一考しておくべきことは、中国文学における尺牘の地位である。尺牘とは書簡文の別称であるが、本来実用文である書簡文が、中国では文学作品の分類として古来重要視されている。中でも六朝時代には、しばしば文学作品が文筆の二字で概括されているが、その文とは押韻する詩賦であり、筆とは無韻の文章のことである。そうして斯波六郎博士の「文筆考」(支那学)第一〇巻収)によれば、筆という用語は書簡文に由来するという。晋・宋の頃には、この書簡文が無韻の文章界つまり散文界の中心をなし、文学作品の代表的な様式として評価された。文体名としては「書」と呼ばれるものであるが、宛先の身分等によって、表・啓・牋・上書・奏記など多くの名称に分化している。「文選」にはこれらの作品が八〇篇も含まれており、同書に収める全散文一八篇の約七割を占めるという。

『道齋尺牘』の跋文において、道齋門下の僧法城は、

尺牘は小技と雖も、亦文章の筌蹄なり。筌蹄苟も備はらずんば、何ぞ魚兔を得ること有らん。

と言ひ、尺牘を文章を学ぶための筌蹄すなわち手段・階梯と考えているが、道齋が尺牘の研究と実作とに力を尽くしたのは、単に文章の筌蹄たるの意義にとどまらず、書簡文を重んずる上述のような中国文学の伝統に、おのずから合致するものと言えよう。

三

道齋の尺牘およびその他の遺文に見える文章論・作文説は、意外にも徂徠が祖述し主張した明の李攀竜・王世貞の古文辞説を、徹底的に排撃するものである。近世日本の漢文学史上、反古文辞の詩文論を主張した著作として著名なものに、太宰春台の『文論』(詩論)(寛延元年一七四八合刊)と、山本北山の『作文志毅』(安永八年一七七九刊)、『作詩志毅』(天明三年一七八三刊)がある。道齋の活躍期に比して、春台の著は約二〇年先だち、北山の著は二〇余年後れる。春台はそれより更に二〇年前に刊行した『倭説要領』(享保一三年一七二八刊)においては、唐の韓愈・柳宗元の古文を、「法度ノ森嚴ナルコトハ、諸家ニ卓絶ナレドモ、陳言ヲ厭テ新奇ヲ好メル故ニ、其文辞古調ニ入ラザル処アリ」と貶し、明の李夢陽・何景明、次いで李攀竜・王世貞に至って、「此弊ヲ改テ辞ヲ修ルコトヲ務ト」し、「修辞ノ学大ニ興レリ」と、古文辞派を推奨している。つまり徂徠の説に追隨していたのである。しかるに二〇年後の『文論』では、専ら韓愈の古文を範として、李・王の古文辞を痛烈に批判し、排撃するに至った。道齋は春台の学を好んだので、その反古文辞作文説は春台の影響を受けるところが多いものと考えられる。しかし春台の説の引用は見られず、すべて道齋自身の見解として、次のように李攀竜・王世貞の古文辞を「爛套之語」と貶し、自分は韓愈・柳宗元の業にならって、左氏伝・班固・司馬遷等の古言を修める者であると主張している。(引用文は節

録、以下同じ。)

今辱くする所の書及び其の文を觀るに、王・李爛套の語、十の八に居り、則ち善く王・李を脩むと謂ふ可きも、古言を脩むとは謂ふ可からざるなり。吾は亡如(不肖の意)と雖も、少しく著す所有れば、輒ち韓・柳の業に效ひ、左氏・班・司馬を脩むる者十の八、晋・唐の諸雅言を脩むる者十の二。寧ろ卑しく寧ろ拙くとも、明人の敝帯を享けず。是れ吾が文を為るの志なり。(道齋先生承論編 一)

道齋の作文説の大きな特色は、唐の柳宗元を最も尊崇している点である。春台の『文論』も、後に出た北山の『作文志』も、文章の理想とする所は韓愈であつて、柳宗元はほとんど問題にしていないが、道齋は文を作るには法を一家に取るべきであるとし、その一家を柳宗元に仰いでいる。

古人は文を作るに、法を一家に取る。退之は孟軻に取り、子厚は丘明に取る。是を以て爛熟して、其の行文用字は、真に己より出づるが如く、完全として一端の錦に似たり。後世は法を諸家に取り、其の行文用字は、真に人より出づるが如く、班乎として糞雜衣に似たり。故に(我も)亦法を一家に取り、嘗て河東(柳宗元のこと)の萃を抜いて唐文式を為り、頗る作文の肯綮を得たり。(道齋尺牘 一)

ここに糞雜衣(ふんぞうえ)というのは、ごみすて場に棄てられた布切を綴り合わせた僧侶の衣のことで、かつて春台が『文論』において古文辞派の文を譏って用いた比喻の語である。ただ春台は、これを古文辞派が古人の成語を寄せ集めている状に

譬え、道齋は諸家の文の法がいりまじつた有様に譬えて用いている点に、少し相違がある。

道齋が柳宗元を特に尊んだ理由は、次の文によつて察せられる。

余曾て李・王の書を読み、之を久しくして之を厭ひ、捨てて顧みず。近歳子厚(柳宗元の字)の文を読み、食へば則ち糞に見、起てば則ち牆に見る。其の文を為るや、明白にして見易く、淳正にして識り易し。古語を用ふること其の口より出づるが如く、蹈襲の跡無くして、又套語の累無し。余之を頌し之を樂しみ、久しくして怠らず、頗る其の意に通ずるを得たり。(唐文式)序

蹈(踏)襲の跡が無く、套語の累が無(無)いことは韓愈も同様であるが、彼の文が剛健で難解な点があるのに対し、柳宗元の文は明白で見易く、淳正で識り易い、つまり平易で柔軟性に富むことが、道齋の性格によく合ったものと考えられる。なおこの序を冠する『唐文式』は、『柳河東集』の中の序の類五卷(卷二―二五)から一五篇の文を選び出して、段落を切り、照応を示し、語句の典拠を注し、総評を下したもので、すなわち柳宗元の文の法を詳細に分析して示したものである。柳州から特に「序」の類を選んだのは、この文体は送序と書序に分れるが、尺牘と同様に日常交友知己の間にしばしば作り交わされる、身近な文章の体裁であるからであり、ここにも實際家としての道齋の面目が現れている。

道齋の作文説で更に注目すべき点は、明の袁宏道の尺牘を推

称していることである。

吾、文は韓・柳を法として辞を古に資り、牘は則ち一に袁石公を体として、又辞を古に借る。王・李は吾が取らざる所なり。夫の石公の牘を為るや、洒々落落として遠く俗套を出で、而して自由三昧に入る。豈に王・李が歇後爛熟の故事を以て、毎に輒ち雷同するの比ならんや。(道齋先生承論編 一一)

石公は即ち明末の袁宏道、字は中郎の号で、この後二〇数年後に江戸の山本北山が、『作文志毅』『作詩志毅』の二書を著して、その清新流麗な性靈説を大いに提唱した。『袁中郎全集』は元禄九年(一六九六)に既に和刻本が刊行されているが、その尺牘のみを集めた『袁中郎先生尺牘』は安永一〇年(一七八一)北山の奚疑塾の刊刻する所である。従つて道齋の袁氏推称ははるかに北山に先だつものであり、袁氏の性靈説を自由三昧という面で把握している。道齋はまた、

吾嘗て窺かに古の著す所を觀るに、歐(陽脩)は蘇(軾)に同じからず、柳は韓に同じからず、(司馬)遷は(左)丘明に同じからず、丘明は又古経に同じからず。同じからざるの故に、一家を成して万世に伝ふ。石公は能く是の機を勸破する者なり。

(同上)

と論じて、袁氏性靈説における個性の尊重を力説している。作文説における袁宏道の推称は、道齋に先だつ太宰春台には全く見られない。故に道齋の所説は後の山本北山の主張の先駆けと

して、日本の漢文学史上注目しに値するものである。

四

道齋の反古文辞作文説の要点は上述のごときものであるが、なお彼の文章論として特色のある主張を以下に掲げておきたい。その一は、作文には辞よりも法に力を尽くすべしとする論である。

吾が韓・柳に癖する者は、其の能く古規に協ふを愛すればなり。二子は力を辞に用ひずして、力を法に用ふ。是に於てか、一字一句其の口より出でざる靡きなり、一篇一章其の法に合せざる靡きなり。夫の王・李が古人に尺寸して、斧跡先づ露はるる者と、大いに逕庭有り。(承論編 一二)

春台の『文論』も辞と法とを併せ掲げて論ずることが少なくないが、辞よりも法を優位に置き、王・李と韓・柳との優劣の差が辞と法との間にあることを明示した点に、道齋の論の特色が認められる。

その二は歇後語の排斥である。歇後語とは成句の上部を取つて下部を省略し、それで全体の意味を示し、または単に下部の語意に用いる一種の隠語である。例えば尚書君陳篇の「友于兄弟」(兄弟に友なり)の句から「友于」の二字を取つて、兄弟を敬愛する意に用いたり、また単に兄弟の意に用いたりするものが、その例である。道齋は多くの語例を掲げた後に、

是れ皆后世優孟の言にして、古人の言に非ざるなり。明の王・李に迫んで一に之を用ふ。抑そも二子は、古言の簡短

に似するを務めて、其の弊の斯に至るを覚らざるなり。夫れ簡とは、言約にして意完きを謂ふなり。之を讀んで闕く有るか疑はるるは、簡に非ざるなり、疎なり。二子の古に匪ちがざること、是に於てか觀る。〔承論編〕三

と論じて、これを排斥している。春台の『文論』も既に歇後語を戲謔の語であるとして退けているが、道齋が古言の簡に似て実は疎なる不完全語であると指摘したのは、その排斥論に一步を進めるものである。

その三は作文においては語助、即ち助字の細かい分析は不要とする論である。道齋には「穩字解」の著があり、初め独立の一書であったが、後に「道齋隨筆」の中に収録されて、その中巻となつている。『朱子語類』(卷一三九)に「作文には自ら穩字有り」と見え、穩字とはもと奇字・難字に対し平穩妥当な文字の意であるが、道齋はこれを助字の義に転用したものと見え、「穩字解」では助字の字源・和訓・用法・用例などを詳論している。語学的天分の豊かな彼の解説は、近世の同類の書からぬきんでて明快である。しかし作文に當つては、そのように細かい穿鑿は無用であるとして、

柳儀曹の書の、「乎・歟・耶・哉・夫は疑辭なり。矣・耳・焉・也は決辭なり」は、大概もて之を言ふも、反つて妙と為す。〔承論編〕四

と言つている。柳儀曹の書とは、柳宗元の「杜温夫に復する書」〔唐柳先生集〕卷三四収である。柳氏のこの大まかな教えがかえつて妙であるとするのは、まことに實際的で甚だ痛快な論

である。

その四は音韻学の書である「韻鏡」を、作文においては無用であるとする論で、これまた痛快を極めている。道齋は、「磨光韻鏡」の名著を成した音韻学者文雄の門に学び、その墓碑銘に「大いに音韻の奥を得たり」と称せられている。また彼の主著「道齋隨筆」の上巻は「読法」と題して、漢字音に関する深い造詣を多く披瀝している。しかるに古道を修め古文を作るためには音韻学は無益であるとし、

足下果して古道に志有らんか、乞ふ韻鑑を以て之を丙丁に付せよ。〔承論編〕六

と極論している。韻鑑とは「韻鏡」の別名であり、「丙丁に付す」とは火中に投ずるの意である。ここにも作文の實際家としての彼の面目が躍動している。

その五は文章を議論文と叙事文とに分つのを不可とし、かつ俳諧すなわちユーモアを重んずべしとする論である。

夫れ詞の弁なる者を以て議論と為し、実の具はる者を以て叙事と為す。宋人創めて之を二にす、古に非ざるなり。左

(左伝)・馬(司馬遷)・韓・柳の文は、一篇中に序事有り、議論有り、俳諧有り、陶鑄して以て章を成す。若し夫れ俳も亦古の弃すてざる所なり。詩に戲謔有り、史に滑稽有り、韓に毛穎有り、柳に乞巧有り。辭を挙あぐること邈ちがくして、義を見しること遠し。文を為りて此に至らざれば、豈に孰し(熟)所に到ると為さんや。〔道齋尺牘附雜文〕雜文七

つまり議論文と叙事文とを明確に分けるのは宋代以来の後人

のしわざで、古文には無いことであり、これらが渾然と融合しているのが真の古文であるとする。ここで特に俳諧について論じ、韓愈の毛穎伝、柳宗元の乞巧文などを挙げて、戯謔文すなわち風刺文学・ユーモア文学の意義を高く評価していることは、道齋の一見識として注目すべきである。

以上が仲道齋の反古文辞作文説に見られる特色の主なものである。彼は太宰春台の『文論』の影響を受けて、反古文辞の方向におもむいたものと考えられるが、春台が専ら韓愈を範としているのに対し、道齋は自己の性格に合した柳宗元に傾倒して、柳文から法を学んでおり、また春台が問題にしなかつた袁宏道に着目し、その性靈説にもとづく自由三昧と個性尊重とを推称して、後の山本北山の主張の先駆けとなっている点は、近世日本の漢文学史上に特筆しなければならぬ。

五

最後に文章家仲道齋の技量を示すものとして、「婢撮伝」と「甘藷伝」の二篇を紹介しておきたい。これらの二文は道齋の得意の作品であったものと見え、「道齋尺牘」三・六では書簡の相手に「婢撮伝」を贈っており、同四六では「甘藷伝」を贈っている。ともに諧謔の中に古文辞の徒に対する風刺を寓した戯文であるが、簡潔な行文中に叙事があり議論があり俳諧があつて、まさしく平生の主張を具体化した代表作と言つてよいであらう。

「婢撮伝」（『道齋尺牘附雜文』雜文四）は、まずつまみ食い

の癖のある下女撮の容姿・性癖および日常の行状を簡潔に描写して、

撮女は澱（淀）川の浜に生れ、十五にして余が家に来る。髮際は眉を去ること僅かに二寸、目は蜂と蠶（さそり）とを兼ね、色は泥塗に混ず。領（首）は野猪の如く、牙（歯）は劍樹の如し。仰げる鼻反りたる耳、其の声は豺（やまいぬ）の若し。其の性臥すことを嗜み、頭枕上に膠して、叫べども起きず。嘗（常）に歌を好んで、口に絶たず。然れども其の音は則ち楚にして、字眼に至れば則ち訛（誤）る。又撮むことを喜み、盤盂の腥漑、筐篋の緒余、手の觸る所、足の履む所、撮まざるは無し。余時に之に迫れば、赧然として大いに愧ぢ、再びすること無き者の若し。苟も顔和し言温なれば、又撮むこと故（もと）の如し。因りて名づけて撮と呼ぶと云ふ。

と命名の由来を明らかにしている。これに続く後半は、伝に附する論贊の形式を用いて、

道齋曰く、今の脩文家も、亦彼に類する者有り。我克く古を為す、我克く古を為すと称して、王・李の集中に徧く、字ごとに撮み句ごとに摘み、釘釘して以て不朽と為し、一枝片玉の其の心田より出づる者無し。日に其の声を売り、其の囊を満たさんことを思ひて、貪り撮むこと滋ます甚だし。外膏（潤）へども中枯れ、新に似て実は腐。終に以て臭を遺すに至る。其の形は儼然として莊なり、其の名は顯然として大なりと雖も、其の為す所は則ち婢なり。亦悲し

む可き夫。

と、当世の古文辞家の文章が、撮女のみまみ食いと変らない醜状をあざけてゐる。わさびのよく効いた風刺文として、一唱三嘆に価するものと言えよう。

「甘藷伝」(東北大学図書館狩野文庫蔵「道齋稿」収)は、さつまいもを好んだ道齋が韓愈の「毛穎伝」に倣つてこれを擬人化し、甘藷を西方天竺の王子に仕立て、その出生来歴と日本への伝来を次のように面白く叙する。

甘藷氏は来ること遠し。往昔西竺に王有り、大茅氏と号す。死して野に葬るや、塚上に忽ち甘藷二本を生ず。日開部を炙るや、一は童男を生み、一は童女を生む。大臣之を聞き、迎へ取りて宮に帰り、養育長生す。王種なるを以て、遂に立てて王と爲し、命じて甘藷を氏とせしむ。甘藷氏に二子有り、一は炬面と名づけ、一は金色と名づく。其の色は紫黄なり、故に之に名づくと云ふ。其の恒に異なるを以て擯斥せられ、雪山の北、草樹鬱鬱の野に至りて、堵を築き舎を営み、自ら号して甘藷氏と曰ふ。

さつまいもの甘さからさとうきびを連想し、さとうきびの形から大がやを連想し、大茅氏を甘藷氏の祖としてゐる。また、その表皮の色によつて、赤い炬面ときいろい金色の二種に分つ。擬人化の巧みさは、読者の頤を解くに足る。

其の形を土芥にし、富貴を趨はず。其の心を無為にして、農民と交はり、人を救ひ人を食(養)ふを務めと爲す。故に天景福を錫(賜)ひ、子孫繩々たり。一浄飯は楚に適き、

二白飯は蔡に適き、三斛飯は秦に適き、四甘飯は閩に適き、皆甘藷を冒す。惟だ閩に在る者は、其の質美にして父祖の業を大にし、子孫亦蕃(繁)し。某歲閩國に大蝗あり、赤地千里、餓莩途に滿つ。粵(越)の甘藷氏倉を發きて民を賑はし、活くる者甚だ衆し。天子召して湯沐を賜ひ、命じて以て膳部と爲す。乃ち博士に令して農政全書を撰せしめ、其の功能を載す。是を以て上は王侯より下は庶人に至るまで、愛重せざるは無し。

論語微子篇に、「大師擊は齊に適き、亜飯干は楚に適き、三飯線は蔡に適き、四飯欠は秦に適く」とある。これに拠つた「一浄飯」云々のパロディーは絶妙である。そのあとは、救荒作物としての効用を顕彰してゐる。

是れ従り厥の後、分れて琉球に至り、陞間(さつま)に来る。故に俗に流求芋と称し、薩摩芋と称す。余は曾て崎陽に遊(遊)び、初めて相見えて旧識の如く、更に推食の遇を受く。余が嗜好なるを以て、一日として吾(御)に在らざんばあらず。帰るに及んで帶携し、日に以て相親しむ。然れども甘氏は席に上るを喜ばず、常に草包中に在らんと欲す。

薩摩に陞間の字を当てることは、貝原益軒の『日本釈名』(上巻)にも見える。文中に長崎遊学の経歴を語っているが、道齋は長崎で唐話を学んだものと考えられる。

一日忽ち鬚を刮り垢を磨り、出でて余に告げて曰く、「我に道有り、善く脾胃を養ひ、善く肝腎を強くし、克く人の

窮貌を療し、克く人の枵腸(きょうちやう、空腹の意)を満たす。昔より今に及ぶまで、其の驗鮮(少)なからず。唯恨むらくは伯夷をして首陽に餓死せしめ、顔回をして陋巷に窮死せしめしを。而して我が為す所は皆性に出でて、敢て人に倣(傲)はず。然りと雖も当世は、人に取るを巧みと為し、己に出づるを拙しと為す。宜なる哉、我の世に不遇なるや。嗚呼命なり」と。道齋云ふ、「吾、子の能を眇(視)るに、恒に異なる者有り。其の恒に異なる者は、其の道必ず顕はる可し。子又憤ること勿れ。余は子の為に、伝を作りて之を広めん」と。是に於てか書す。

終段は「婢撮伝」と同じように、古文辞派の文章を風刺するものであるが、その表現は隱微であり、甘藷の伝としての全篇のまとまりが緊密化されている。

道齋が京都で盛んに反古文辞作文説を唱え、これを流麗な尺牘文に載せて門下を啓発した宝曆四、五年の頃から約二五年後

『徳島大学国語国文学』投稿規程

一、本誌は、徳島大学国語国文学会の機関誌(毎年三月末刊行)として、多くの會員の投稿を歓迎する。

一、投稿は、原則として會員に限るが、それ以外に依頼することもある。

一、投稿論文は、四百字詰原稿用紙三十枚

に、江戸の山本北山は『作文志毅』『作詩志毅』の二書を刊行して、大いに李・王の陋習を排撃し、清新な袁宏道の性靈説を高唱した。詩文における反古文辞の論と言えば、専ら北山の両著が日本の漢文学史上に有名である。しかしながら北山に先だつて、道齋のごとき論客が存在したことを忘れてはならない。

かつ北山はその議論の華々しさに反して、詩文の実作には見るべきものがないという批評がある。猪口篤志氏は、「北山の詩には見るべき作はほとんどなく、その誇らしげに『作文志毅』に載せた螿竜説のごときも、疵病多々。」(『日本漢文学史』三三三頁)と評している。この点道齋の文章は才気煥発で、その作文説と車の両輪を成している。上掲の二文のごときは、これを実証して余りあるであらう。

(附記) 本稿は全国漢文教育学会第六回大会(平成二年六月三日、高知大学)における研究発表に補訂を加えたものである。

(たけじ・さだお 本学名誉教授・徳島文理大学教授)

以内を原則とする。このほかに、研究ノート(同二十枚程度)、授業報告(同十枚程度)なども受け付ける。

一、投稿論文には、四百字詰原稿用紙二枚程度

の要旨を添え、氏名・住所(電話番号)・所属・最終学歴(卒業年)を明記のうえ、

本学会事務局宛送付されたい。

一、投稿の締切は毎年十月十五日とする。

一、採否は、編集委員会(理事会)に一任されたい。

一、校正は、初校のみを執筆者にまわし、以後は事務局で行うことを原則とする。ただし、特に事情ある場合は申し出られたい。

一、掲載論文の執筆者には、本誌二部を贈呈する。抜刷は、実費を申し受ける。

一、掲載論文は、四百字詰原稿用紙三十枚

一、投稿の締切は毎年十月十五日とする。